

住居観に関する研究

その3. 住居観と平面構成志向の関連

中 島 喜代子

Studies on the View of Dwelling House and Home Life

Part3, The Relation between the View of Dwelling House and Home Life, and Demands for House Planning

Kiyoko NAKAJIMA

1. 緒 論

本研究その1¹⁾では、住居観を類型としてとらえ、住居観型の仮説の設定から出発して、統計処理により住居観パターンを抽出した。その上で、個々の住居意識が住居観と関連をもつことを検討し、住居観が個々の住居意識に影響を与える潜在的基盤であることを実証した。また、その2²⁾では、住要求・住評価が住居観と関連をもつことを実証し、各住居観パターンがそれらに対してもつ特徴を明きらかにした。

本報では、住居観が住宅のデザイン志向を左右する重要な要因であることを明確にし、住宅設計計画学の解析的指標として有効性をもつことを検証する。

住居観と住宅の平面構成志向、外観デザイン志向との関連性の検討については、すでに集合住宅居住者の主婦を対象としてこれを行ない、実証してきたが³⁾ 特定の対象だけでなく、一般居住者の夫と妻においてもこの関連性を実証することが目的である。

分析の手順は、まず住居観パターンを統計的に抽出し、住居観パターンと住居意識・住理想の関連を検討し、さらに住居観パターンと住生活の実態の関連を検討して、その平面構成志向の特徴をとらえる。

2. 研究の方法

調査の対象を全用途地域をカバーする対象とするため都市計画地図を参考に、三重県四日市市の住宅地域、商業地域、工業地域にある小・中学校を選択し、さらに農業地域として三重県南勢に位置する度会郡および三重県中勢に位置する安芸郡安濃町にあ

る中学校を対象として、表1に示す956件の父母のサンプルを得た。調査時期は、昭和55年6～7月である。

調査対象の概要は、表2に示すように、現在居住している住宅では約3/4が持家であり、約5/6を専用住宅が占め、約4/5が一戸建住宅に居住している。家族人数は、4人～6人が殆んどを占め、拡大家族の割合も約4割にせまっているため、平均家族人数も4.84人と多い。夫の職業も一般労働職が約3割、自営業も約2割を占めるなど、職業分布にも特定の職業への大きな片寄りが無い。

3. 調査結果と考察

1) 夫と妻の住居意識の特徴と住居観パターンの抽出

前報その1で示した住居観型仮説の9類型に対し、表3に示す13項目の住居意識を作成し、「思う」「やや思う」「なんともいえない」「あまり思わない」「思わない」の5段階評価の回答方式として、「思う」から「思わない」について、それぞれ1点から5点の点数を与えた。

(1) 夫・妻別住居意識の平均点比較

夫と妻の住居意識の相異をとらえるため、まず、夫・妻別に各住居意識の平均点を算出し、図1に示す。

夫と妻の住居意識を比較すると、夫では、「自律」意識と「社会性重視」意識の地域的環境問題を重視する項目に対しては肯定的傾向を示し、妻では、「しきり」意識、「ねぐら」意識、「マイホーム主義」意識、「合理」意識に肯定傾向を示す点で違いがある。

表 1 調査の概要

学校所在地	学 校 名	配布数	回収数	有 効 標本数	回収率 (%)	有 効 標本率 (%)	無 効 数				
							計	不十分	欠損 家庭	父母一方 のみ記入	無記入
農 業 地	青陵中学校	182	180	114	98.9	63.3	66	36	9	3	18
	東観中学校	254	246	153	96.9	62.2	93	66	5	14	8
住 宅 地	高花平小学校	416	401	230	96.4	57.4	171	83	16	20	52
商 業 地	中部東小学校	228	204	115	89.5	56.4	89	47	6	6	30
	中部中学校	201	185	127	92.0	68.6	58	29	9	8	12
工 業 地	三浜小学校	353	345	217	97.7	62.9	128	90	18	14	6
全 体		1,634	1,561	956	95.5	61.2	605	352	63	65	126

表 2 調査対象の概要

家族人数	件 数	(%)	家 族 型	件 数	(%)
3 人	34	(3.6)	核 家 族	562	(58.8)
4 人	369	(38.6)	拡 大 家 族	352	(36.8)
5 人	281	(29.4)	不 明	42	(4.4)
6 人	168	(17.6)	全 体	956	(100.0)
7 人	51	(5.3)			
8 人	8	(0.8)			
不 明	45	(4.7)			
全 体	956	(100.0)			
平均家族人数	4.84人				
夫の職業	件 数	(%)	現住宅の所有関係	件 数	(%)
農林・漁業	22	(2.3)	持 家	715	(74.8)
専門・技術職	52	(5.4)	公 的 借 家	91	(9.5)
管 理 職	161	(16.8)	民 営 借 家	58	(6.1)
自 由 業	35	(3.7)	給 与 住 宅	84	(8.8)
事 務 職	94	(9.8)	不 明	8	(0.8)
販売・サービス職	72	(7.5)	全 体	956	(100.0)
一般労働職	259	(27.1)			
自 営 業	180	(18.8)			
そ の 他	18	(1.9)			
無 職	1	(0.1)			
不 明	62	(6.5)			
全 体	956	(100.0)			
			現住宅の住宅様式	件 数	(%)
			専 用 住 宅	619	(64.7)
			店 舗 併 用 住 宅	116	(12.1)
			工 場 併 用 住 宅	18	(1.9)
			農 家	167	(17.5)
			そ の 他	13	(1.4)
			不 明	23	(2.4)
			全 体	956	(100.0)

表3 調査に使用した住居観構成住意見項目

住居観型	項 目	略 省 名 ※
ねぐら型	1. 住宅は雨露をしのげさえすればよい。	雨露をしのぐ
しきたり型	2. 冠婚葬祭の行事に困らないように、続き部屋が必要である。	つづきま
〃	3. 家を建てる場合には、家相を気にする方である。	家 相
みせびらかし型	4. 人の目につく玄関や居間は豪華にしたい	玄関豪華
うちでも型	5. 住宅は、近所とのつりあいとれたものにするのがよい。	つりあい
あたらしがり型	6. 便利そうな道具（電気製品など）が新発売されると、使つて ためしたいと思う。	新 製 品
マイホーム主義型	7. 家を建てる時は、建築家や大工まかせにしないで、家族皆で 間取をよく考え、みんなで楽しめる家になりたい	家族間取
〃	8. 客は、居間を通して家族全員でもてなすのがよい。	居間接客
合 理 型	9. 住宅はあまり広いものより、必要な部屋だけあればよい。	必 要 室
自 律 型	10. たとえ資金にあまり余裕がなくても、住宅や家具は自分の個 性にあつたものを選びたい。	個性重視
〃	11. 他人のうわさなど気にせず、改善すべき事があつたら実行し たい。	うわさ気にせず
社会性重視型	12. 環境問題や公害問題・住宅問題に常に關心をもち、改善のた めに働きかけたい。	環境問題
〃	13. 持家を奨励するよりも、公営住宅などの公的住宅をもっと増 やすべきである。	公営住宅

※ 以後この略省名を用いる。

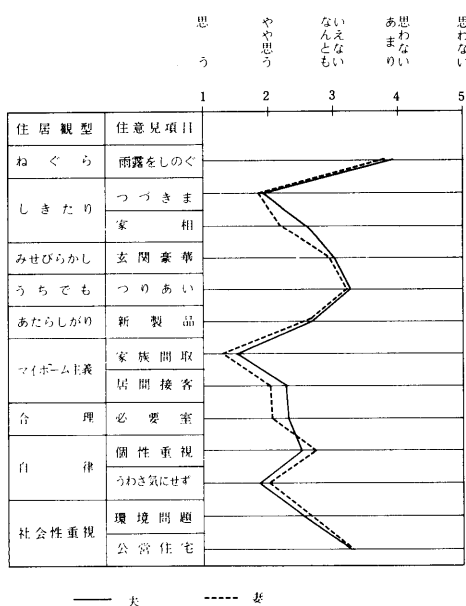


図1 夫と妻別住意見の平均点

(2) 夫・妻別住意見の因子分析結果比較

次に、夫と妻の住意識構造の違いをとらえるため、夫・妻別に13項目の住意見について因子分析⁹⁾を行なった結果を表4に示す。

夫の第1因子は「みせびらかし」意識と「自律」意識に関する因子、第2因子は「マイホーム主義」意識に関する因子、第3因子は「ねぐら」意識に関する因子、第4因子は「しきたり」意識に関する因子である。

妻の第1因子は「しきたり」意識と「みせびらかし」意識に関する因子、第2因子は「自律」意識と「みせびらかし」意識に関する因子、第3因子は「ねぐら」意識に関する因子、第4因子は「マイホーム主義」意識に関する意識、第5因子は「社会性重視」意識に関する因子である。

夫の第1、第2、第3、第4因子は、それぞれ妻の第2、第4、第3、第1因子と類似であるが、妻では「社会性重視」意識が独立因子を構成しているのに対して、夫では第2と第3因子に分離しており、「環境問題」と「公営住宅」の2項目に対する意識の関連性は薄い。また、妻では「しきたり」意識と「みせびらかし」意識が同じ第1因子に含まれており、両意識の関連性が強い点で違いがみられる。

表4 夫・妻別住意見の因子分析結果

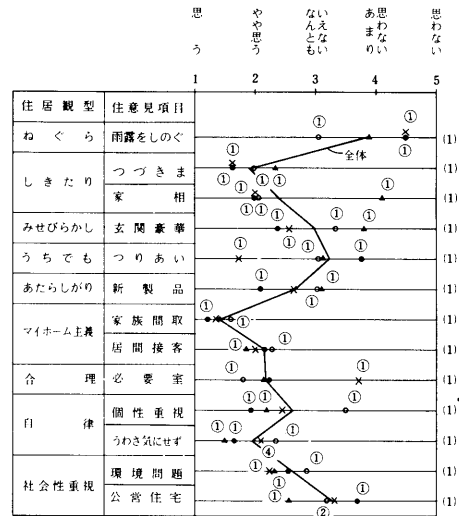
() 内の数字は因子負荷量
() 内の数字は寄与率

	夫 項目(因子負荷量)	妻 項目(因子負荷量)
FACTOR 1	玄閣豪華 (0.57139) 新製品 (0.46268) 個性 (0.44335) (46.2%)	家相 (0.64584) 玄閣豪華 (0.37048) つづきま (0.35849) 新製品 (0.30726) (36.9%)
FACTOR 2	家族間取 (0.60695) 居間接客 (0.39758) うわさ気にせず (0.35672) 環境問題 (0.33784) (23.4%)	個性 (0.60573) 玄閣豪華 (0.43071) 新製品 (0.35208) (23.3%)
FACTOR 3	雨露をしのぐ (0.51833) 必要室 (0.37540) つりあい (0.33423) 公営住宅 (0.29166) (17.9%)	雨露をしのぐ (0.64756) 必要室 (0.31580) (18.5%)
FACTOR 4	家相 (0.68143) (12.5%)	家族間取 (0.52637) うわさ気にせず (0.42468) (11.0%)
FACTOR 5		環境問題 (0.59828) 公営住宅 (0.31417) つりあい (0.31270) (10.2%)

(3) 住居観パターンの抽出とその住意識の特徴

住居観パターンの抽出方法は、前報その1と同様に、Qモード因子分析⁹⁾を用い、同プロセスによって4つのクラスターを得た。各クラスターの特徴を把握するため、用いた13の住意見項目の平均値を各クラスター別に算出した結果を図2に示す。各意見とも、4クラスター間の平均値の差の検定に1%水準までの有意差がみられた。表5に各クラスターの肯定項目と否定項目の結果のまとめを示す。

第1のクラスターは、「ねぐら」意識、「合理」意識が他パターンより特に肯定傾向を示し、逆に、「自律」「みせびらかし」「あたらしがり」「マイホーム主義」の各意識すべてに他パターンより否定傾向を示す。このクラスターは、「ねぐら」意識が強く、住に対しては無関心な「合理型類型」のクラスターといえる



(注) ○内の数字はその型と他の2分割による平均値の差の検定による有意差(%)
()内の数字は4住居観パターン別の平均値の差の検定による有意差(%)

○ 合理型類型 (第1軸) ● 誇示型類型 (第2軸) ▲ 自律型類型 (第3軸) × 慣習型類型 (第4軸)

図2 住居観類型別住意見の平均点

表5 住居観類型別肯定項目と否定項目

() 内は住居観型名

	合理型類型	誇示型類型	自律型類型	慣習型類型	
肯定項目	雨露をしのぐ(ねぐら)	玄閣豪華	個性重視(自律)	つづきま(しきたり)	
	必要室(合理)	新製品	うわさ気にせず(自律)	家相(しきたり)	
	家相(しきたり)	あたらしがり	個性重視(自律)	居間接客(マイホーム主義)	
	つりあい(うちでも)	うわさ気にせず(自律)	環境重視(社会性重視)	玄閣豪華(みせびらかし)	
	公営住宅(社会性重視)	つづきま(しきたり)	公営住宅(社会性重視)	環境問題(社会性重視)	
		家相(しきたり)			
		家族間取(マイホーム主義)			
	否定項目	個性重視(自律)	雨露をしのぐ(ねぐら)	つづきま(しきたり)	雨露をしのぐ(ねぐら)
		うわさ気にせず(自律)	つりあい(うちでも)	家相(しきたり)	必要室(合理)
		環境問題(社会性重視)	公営住宅(社会性重視)	玄閣豪華(みせびらかし)	うわさ気にせず(自律)
		玄閣豪華(みせびらかし)		新製品(あたらしがり)	
		新製品(あたらしがり)			
		つづきま(しきたり)			
家族間取(マイホーム主義)					
居間接客(マイホーム主義)					

(注) ※印のもの以外は、絶対的肯定・否定を示すのではなく、住居観類型間での相対的肯定・否定を示す。

第2のクラスターは、「みせびらかし」意識、「あたりしがり」意識、「しきたり」意識が特に他パターンより肯定的傾向を示し、「自律」意識に対しても肯定傾向を示している。逆に、「ねぐら」意識、「うちでも」意識、「社会性重視」意識の「公営住宅」項目に他パターンより否定傾向を示し、第1のクラスターとはほぼ肯定、否定項目が相反している。他人からの突出、先行を好み、社会性に対する関心の弱いこのクラスターは「誇示型類型」のクラスターといえよう。

第3のクラスターは、「自律」意識、「社会性重視」意識に対して他パターンより肯定傾向を示し、「しきたり」意識、「みせびらかし」意識、「あたりしがり」意識に対しては他パターンより否定傾向を示す。このクラスターは、他からの規範や影響を否定する「自律型類型」のクラスターといえよう。

第4のクラスターは、「しきたり」意識、「うちでも」意識、「みせびらかし」意識、「社会性重視」意識の「環境問題」項目を肯定し、「ねぐら」意識、「合理」意識、「自律」意識の「うわさ気にせず」項目を他パターンより否定している。「みせびらかし」意識や「しきたり」意識を肯定する点で、第2のクラスターとよく似た特徴をもつが、このクラスターが「うちでも」意識を肯定し「環境問題」項目を肯定するなど、居住地域に対する関心が強いこと、「あたりしがり」意識や「自律」意識に対して第2クラスターが肯定傾向を示すのにくらべてそれがなく、居住地域内での突出や先行を好まないこと、「合理」意識に

対して特に否定傾向が強いことなどの点で異なっている。このクラスターは、居住地域との密着性の強い「慣習型類型」のクラスターといえよう。

以上4クラスター⁷⁾の件数のうちわけを表6に示す。

表6 住居観類型のうちわけ

	合理型類型 件数 (%)	誇示型類型 件数 (%)	自律型類型 件数 (%)	慣習型類型 件数 (%)	計 件数 (%)
夫	326(34.1)	370(38.7)	181(18.9)	79(8.3)	956(100.0)
妻	391(40.9)	347(36.3)	138(14.4)	80(8.4)	956(100.0)
全体	717(37.5)	717(37.5)	319(16.7)	159(8.3)	1,912(100.0)

夫では、「誇示型類型」と「自律型類型」の割合が妻よりやや多く、妻では「合理型類型」の占める割合が多くなっている。

2) 住意見・住理想からみた住居観と平面構成志向の関連

(1) 余裕の一室に対して希望する部屋の用途

もし、食事室、団らん室、夫婦と子供の寝室が確立されていると仮定するとき、あと一室余裕室があれば何の用途に使いたいかを知ることにより、平面構成志向の一側面を探ろうとした。図3に示す7種類の室名をあげて調査した結果、各住居観パターン別に各室に対する希望の構成比は、同図のようであった。

夫・妻ともに、接客室に対する希望が最も多く、夫では書斎がそれに次ぎ、娯楽室の希望も妻より多

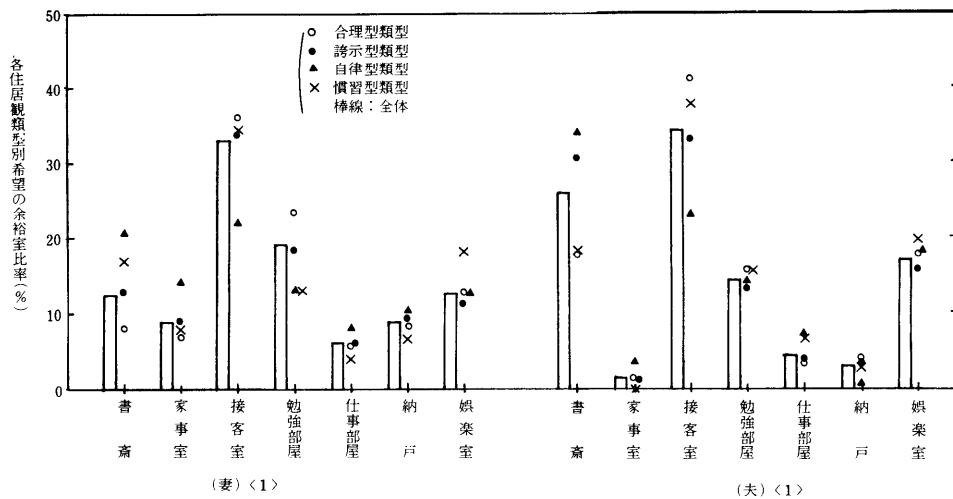


図3 住居観類型と希望する余裕室の関連

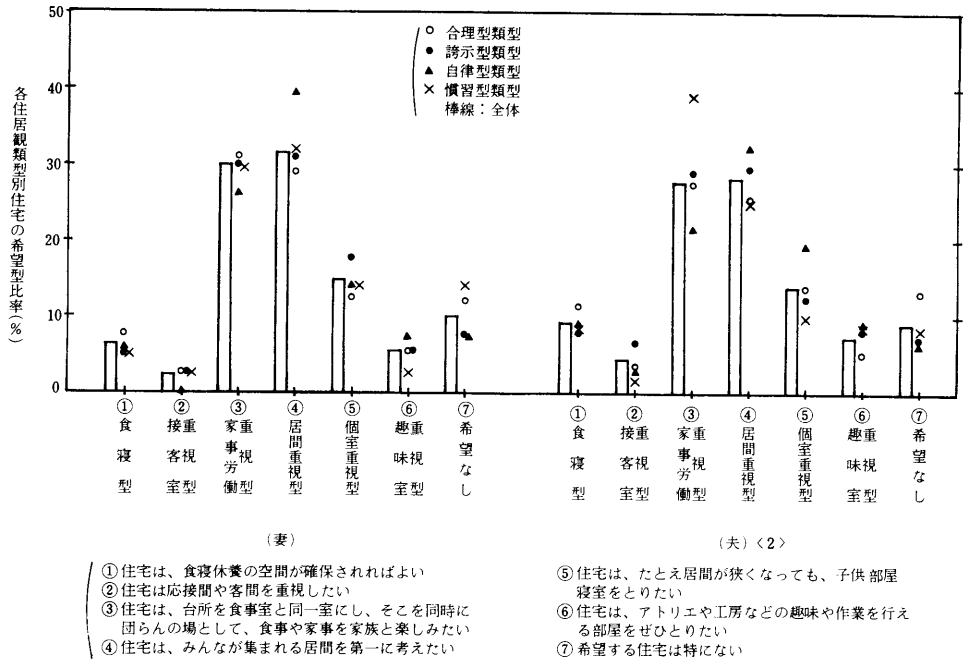


図4 住居観類型と住宅の希望型の関連

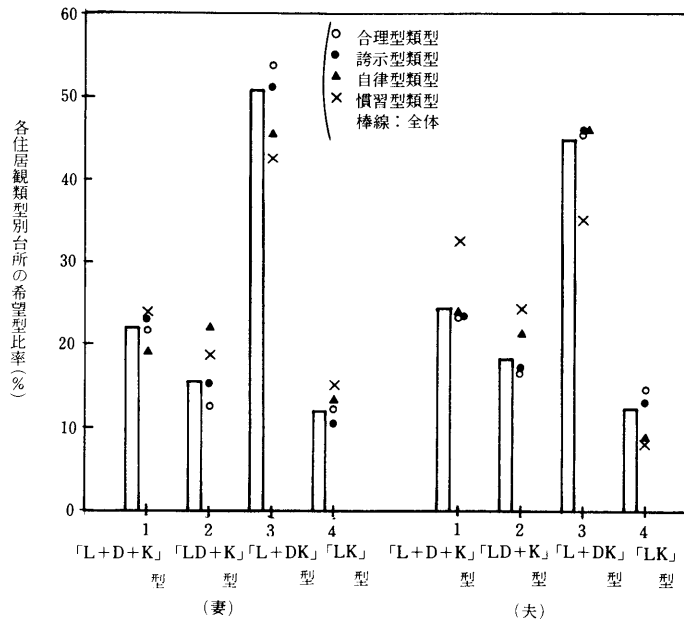


図5 住居観類型と台所の希望型の関連

くなっている。一方、妻では、家事室、納戸、勉強部屋など、家事や子供用の部屋の希望が夫より多い。

住居観パターン別にみると、夫・妻ともに「自律型類型」で書斎を希望する割合が他パターンより多く、接客室の希望は他パターンより少ない(χ^2 検定は、夫・妻ともに1%水準で有意差あり)。

(2) 住宅の希望型

図4にあげた6種類の平面構成類型のうちどれを希望するかを同図で示すような項目で質問し、各住居観パターン別にその構成比を示す。

夫・妻ともに、「家事労働重視型」と「居間重視型」の希望が多い。

住居観パターン別にみると、夫の場合「慣習型類型」で「家事労働重視型」の希望が多く、「自律型類型」では「個室重視型」と「居間重視型」の希望がやや多い。また、「合理型類型」では「希望なし」の割合が多い傾向がみられた(χ^2 検定5%水準で有意差あり)。妻では χ^2 検定10%水準までの有意差はみられないが、「自律型類型」で「居間重視型」、「慣習型類型」で「希望なし」の割合が多い傾向がみられる。

(3) 居間・食事室・台所のつながりの希望型

居間、食事室、台所のつながりの型を「L+D+K」型、「L+DK」型、「LD+K」型、「LK」型の4つのタイプに分け、その希望を質問した。住居観パターン別の構成比を図5に示す。

全体では、夫・妻ともに「L+DK」型が約半数を占めている。

住居観パターン別にみると、 χ^2 検定10%水準までの有意差はないが、夫では「慣習型類型」で「L+D+K」型および「LD+K」型の独立キッチン希望が他パターンより多くなっており、妻の「自律型類型」では「LD+K」型が多い。

(4) 住空間の分離志向

平面構成志向を探る一つの方法として、どの様な行為を空間的に分離することを優先するかという住空間の分離志向の側面から、これを検討する。図6にあげた6種類の行為の重なりに対する分離について、1位から6位までの順位をつける方法で質問し、各住居観パターン別の平均順位を同図に示す。

夫・妻ともに平均順位は、上位から「1. 親子就寝分離」、「2. 異性子就寝分離」、「4. 就寝、接客室分離」、「5. 公私室分離」、「6. 団らん、接客室分離」、「3. 同性子就寝分離」の順になっている。

住居観パターン別にみると、夫・妻ともに「自律型類型」で「1. 親子就寝分離」「2. 異性子就寝分離」の順位が他パターンより上位にあり、逆に「4

就寝、接客室分離」、「6. 団らん、接客室分離」の両接客室独立志向は弱い。すなわち、他のパターンすべてが、公私室分離より接客室の独立を優先志向している中で、「自律型類型」のみが、公私室分離、就寝分離の方を優先志向している。また、「3. 同性子就寝分離」の志向が弱く、夫婦室優先志向が強い傾向もみられる。「慣習型類型」の妻、「誇示型類型」の夫では、接客室独立志向が強い。

(5) 住の諸側面に対する希望

図7に示す起居様式に対する希望、住宅平面構成における重視空間の傾向、プライバシーに対する志向、収納、モノ所有等に対する希望について、「思う」から「思わない」までの5段階評価にそれぞれ1点から5点までの点数を与えて、各住居観パターン別にそれぞれの項目の平均点を算出した。その質問項目と結果を同図に示す。

① 起居様式に対する希望では、食事室・居間、子供部屋について、夫・妻ともに「誇示型類型」で、イス座志向がやや強く、この型の妻では接客室に対しても同傾向を示す。

② 平面構成上の重視空間の傾向では、夫・妻ともに、「自律型類型」で接客室重視志向が弱く、逆に「誇示型類型」の妻では接客室重視志向が強い。また、「自律型類型」の妻では夫婦室優先志向の傾向もみられる。

③ 住空間におけるプライバシーに対する志向の傾向では、夫・妻とも全体的に、台所や食事室を客にみえないようにする希望が強い中で、「自律型類型」の妻ではそれが弱い。また、個室間の間仕切をふすまにする希望は、夫・妻ともに「合理型類型」で他パターンより強い。

④ 収納空間に対する希望では、妻の「誇示型類型」で「15. 各室収納」を希望する傾向があり、夫の「自律型類型」では「12. すぐ使える状態」、「14. 納戸集中収納」希望の傾向がある。

⑤ モノ所有に対する希望では、夫・妻ともに「自律型類型」で、モノを多く所有することに対する否定的傾向が強く、「慣習型類型」の夫ではそれが弱くなっている。

3) 住生活の実態からみた住居観と平面構成志向の関連

本節では、住宅における住生活の実態について、住居観パターンによる相異を検討する。居住者は、現実の住空間の中で生活することによって、その中で平面構成志向を表現していると考えられる。現実

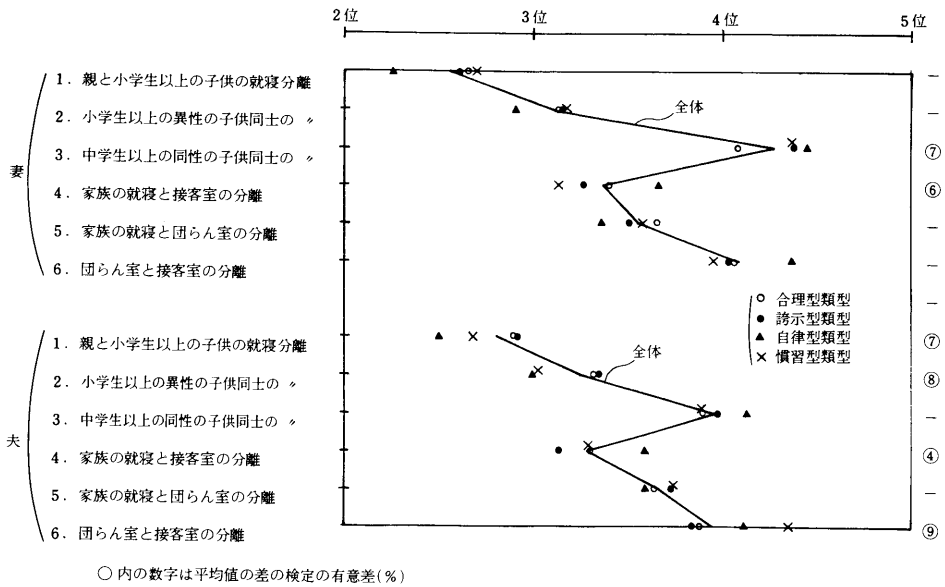


図6 住居観類型と空間分離志向の関連 (平均点)

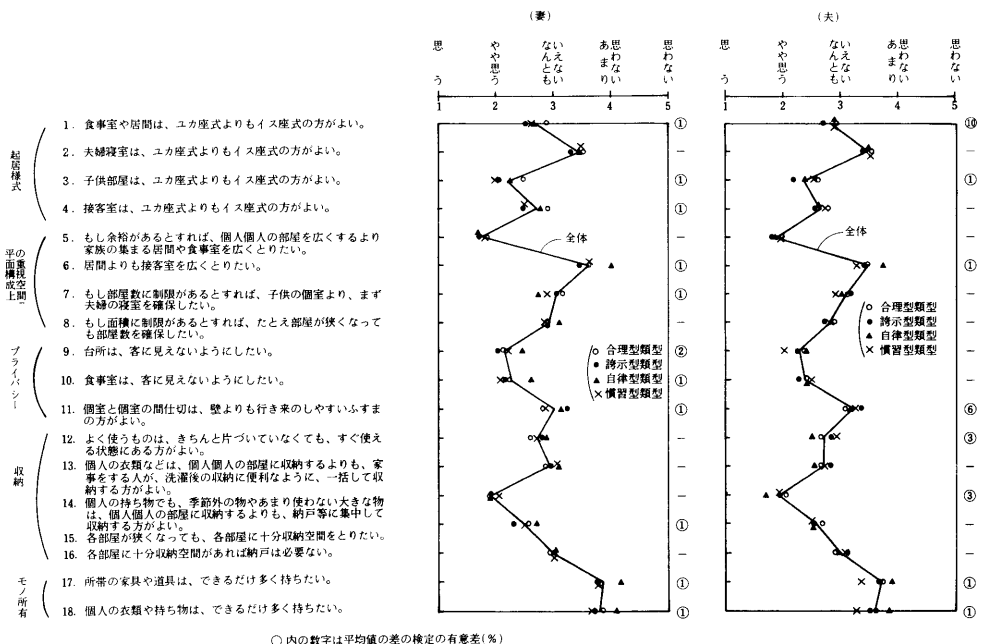
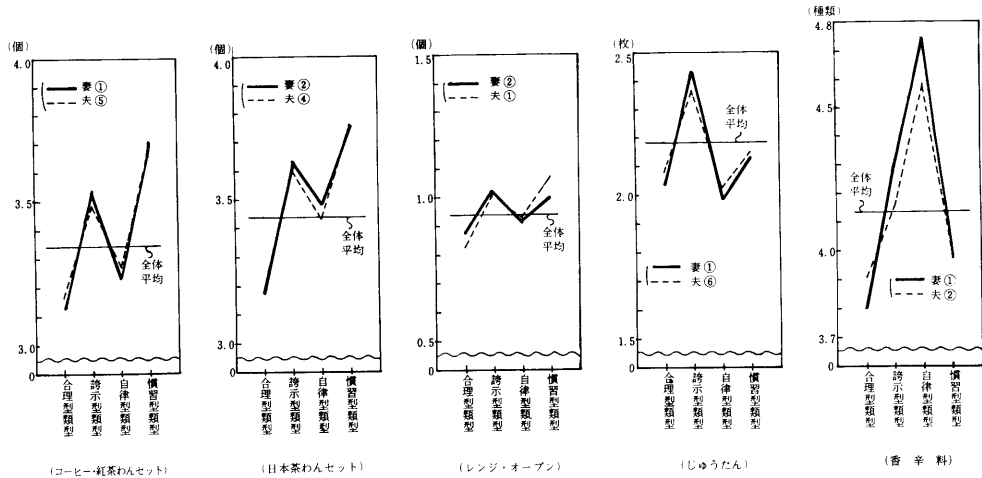


図7 住居観類型と住意見の平均点の関連



○内の数字は平均値の差の検定による有意差(%)

図8 住居観類型と各生活用品の平均所有数の関連

の空間の制限によって、それが規制される側面もあるが、ここから居住者の平面構成志向の一面をとらえることは、充分可能であると考えられる。

住生活の実態として、モノ所有、起居様式、台所・食事室・団らん室・接客室等の公室のあり方、就寝室、余裕室、居住型、住み方の矛盾等の諸側面から検討を加える。

(1) 生活用品の所有

コーヒー・紅茶わんセット、日本茶わんセット、レンジ・オープン、じゅうたん、香辛料について、その所有個数と住居観パターンの関連を検討する。各住居観パターン別の平均所有個数を図8に示す。

夫・妻ともに、コーヒー・紅茶わんセット、レンジ・オープンについては「慣習型類型」と「誇示型類型」で所有個数が多く、じゅうたんでは「誇示型類型」、香辛料では「自律型類型」でそれぞれ所有個数が多くなっている。しかし、「合理型類型」では、すべての生活用品について所有個数は少なく、前節のモノ所有意識と住居観パターンの関連の項でとらえた傾向（多く所有することを他パターンに比して特に否定傾向を示していない）とはギャップがみられるが、「誇示型類型」と「慣習型類型」のモノ多所有志向（他パターンに比して）とは連動しており、「自律型類型」の多所有否定志向とも香辛料を除いては関連している。香辛料は住戸面積規模の大小とは関連をもたないものであり、個性的生活志向の表われという意味で、この型の特徴が表現されているといえよう。

(2) 起居様式の実態

図9、10に示す各生活行為に対する起居様式の実態について、各住居観パターン別の割合を同図に示す。

朝食については、夫・妻ともに「誇示型類型」でイス座の割合が多く、夕食についても同傾向を示しており、この型のイス座志向を裏付けている。「自律型類型」の妻、「誇示型類型」と「合理型類型」の夫では子供の就寝のイス座化率が高い。

(3) 居間、食事室、台所のあり方

食卓と団らん用机の異同と位置から、公室のあり方をとらえ、住居観パターンとの関連を検討する。各パターン別の割合を図11に示す。

食卓と団らん用机が同じである割合、両机が同室に置かれる割合は、夫・妻ともに「誇示型類型」、「慣習型類型」でその割合が高く（ χ^2 検定10%水準で有意差あり）、夫の「慣習型類型」における独立キッチン志向の強さを裏付けている。

(4) 接客室のあり方

接客が行なわれる部屋の使用実態と住居観パターンの関連を図12に示す。

夫・妻ともに「誇示型類型」で、専用接客室で接客が行われる率が高く（両者とも χ^2 検定1%、10%水準で有意差あり）、「合理型類型」では、居間兼寝室で接客が行われる率が高い（夫で χ^2 検定10%水準で有意差あり）。また、「自律型類型」では、居間で接客が行なわれる率が高く、専用接客室を持つ率は低い傾向がみられる。すなわち、「誇示型類型」の

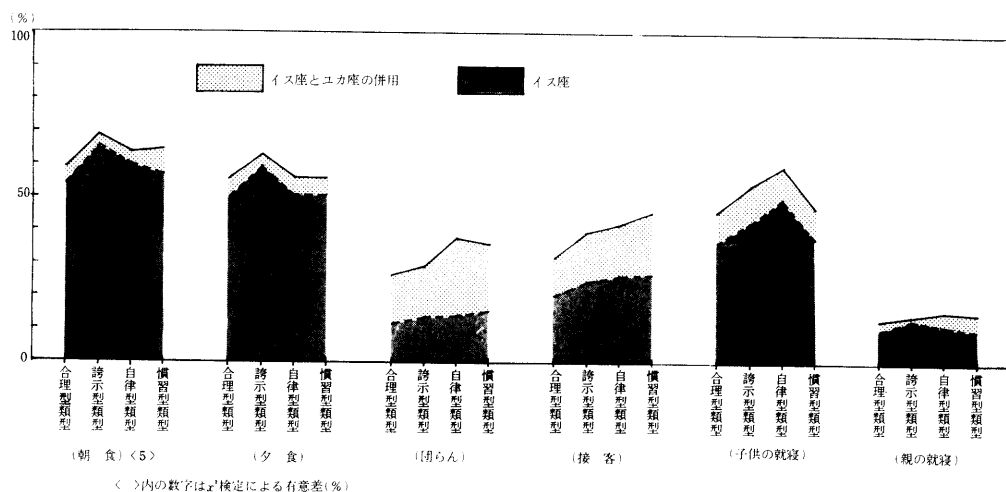


図9 住居観類型と各生活行為の起居様式の関連 (妻)

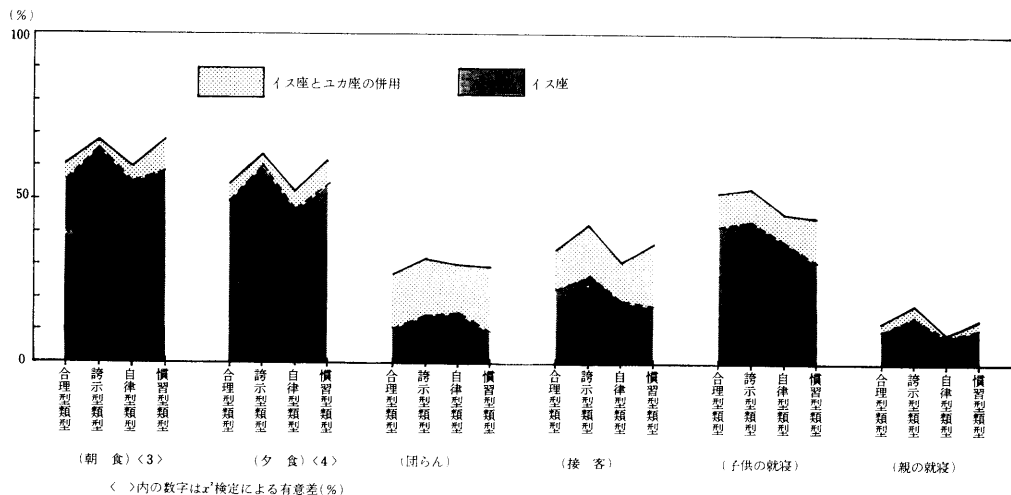


図10 住居観類型と各生活行為の起居様式の関連 (夫)

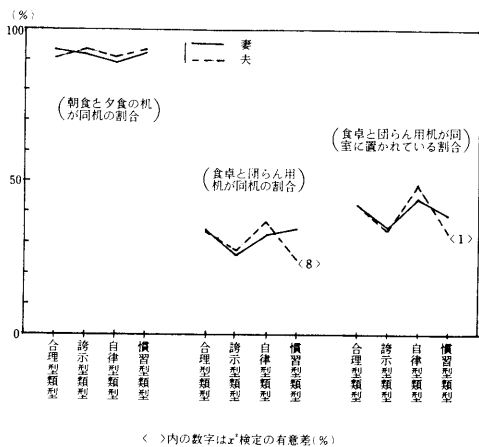


図11 住居観類型と食卓および団らん用機の位置の関連

接客室優先志向と、「自律型類型」の家族室優先志向、「合理型類型」の住空間重複使用の傾向がとらえられる。

(5) 就寝室のあり方

家族が就寝を行なう部屋の使用実態と住居観パターンの関連を図13に示す。

妻では、親と小学生以上の子との同一室就寝（以後親子同一室就寝と記す）、中学生以上の同性の子供同士の同一室就寝（以後同性子同一室就寝と記す）が行われる率は、「合理型類型」で多く（両者とも x^2 検定10%水準で有意差あり）、夫では居間就寝と接客室就寝が「合理型類型」でやや多く、「慣習型類型」では逆に少ない傾向がみられる。すなわち、妻の「合理型類型」では家族間の就寝の重複が多くみられ、

住居観に関する研究 その3. 住居観と平面構成志向の関連

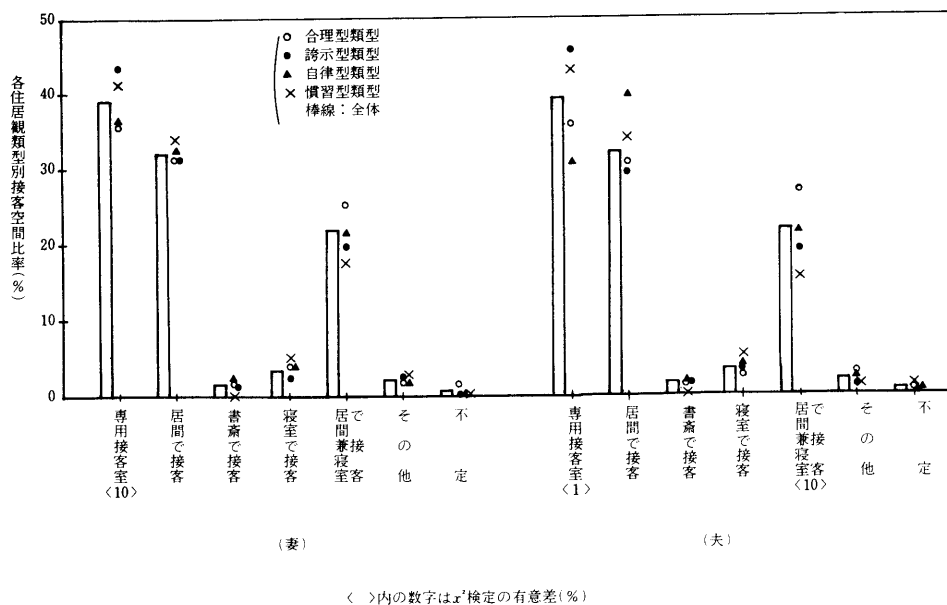


図12 住居観類型と接客を行なう各空間別割合の関連

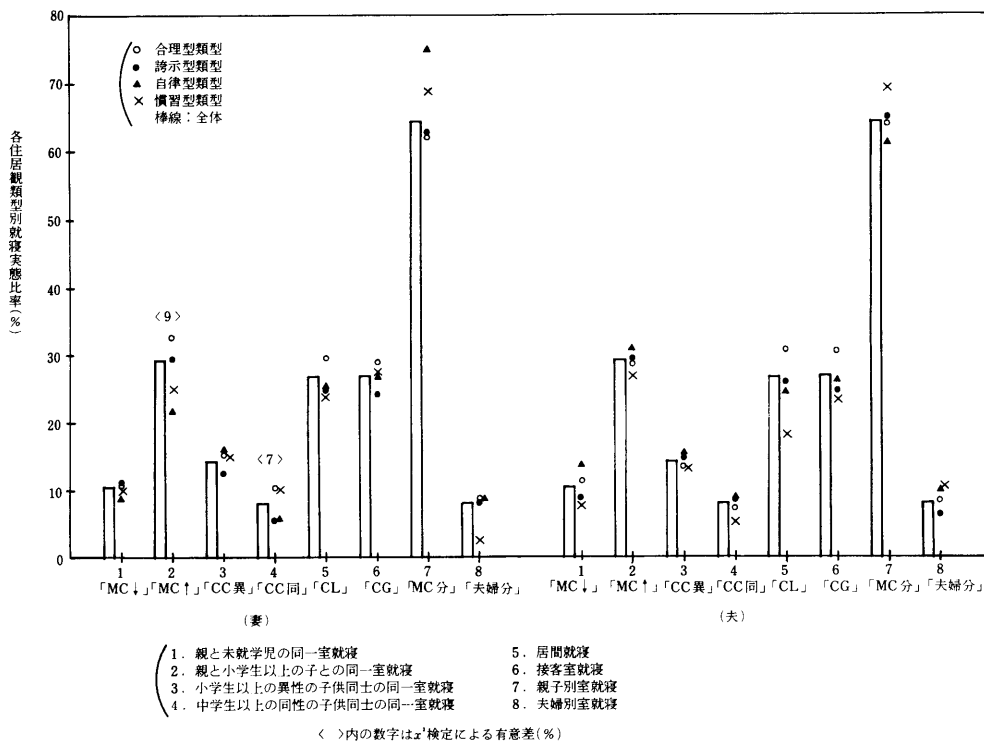


図13 住居観類型と就寝実態の関連

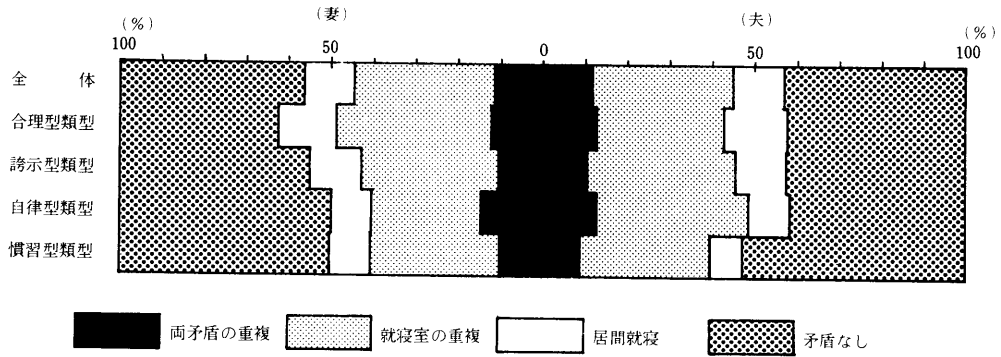


図14 住居観類型と住み方の矛盾の関連

夫の「合理型類型」では、居間、接客室などの公室と私室との空間使用の重複がみられる。

(6) 住み方の矛盾

「親子同一室就寝」および小学生以上の異性の子供同士の同一室就寝（以後異性子同一室就寝と記す）、「同性子同一室就寝」などの就寝の重複による住み方の矛盾（以下これをまとめて就寝室の重複と記す）と、「居間就寝」という異質行為の重複による矛盾の住居観パターン別の割合を図14に示す。

妻の「合理型類型」では「就寝室の重複」の割合が多く、「矛盾なし」の割合が少ない。また、夫の「慣習型類型」では、「居間就寝」の割合が少なく「矛盾なし」の割合が多い。

(7) 居住型

ここでは、居住型を前記の住み方の矛盾の有無および余裕室の有無を組み合わせ4つのパターンに分類する。すなわち、「余裕型」は住み方に矛盾（就寝室の重複、居間就寝）がなく、余裕室のある場合であり、「矛盾型」は矛盾のある住み方をしている余裕室のある場合、「不足型」は矛盾のある住み方をしている余裕のない場合、「充足型」は住み方の矛盾がなく余裕室のない場合である。住居観パターン別の割合を図15に示す。

夫・妻に共通して「慣習型類型」で、「余裕型」の割合が多く「不足型」が少ない。「自律型類型」では、夫・妻とも「矛盾型」が少ない傾向がある。また、「矛盾型」の割合が多いのは、妻では「合理型類型」、夫では「誇示型類型」にみられる（妻では χ^2 検定5%水準で有意差あり）。

(8) 余裕室の用途

まず、住居観パターン別の平均余裕室数を図16に示す。夫・妻ともに、「自律型類型」と「合理型類型」で平均余裕室数が少なく、逆に「誇示型類型」と「慣

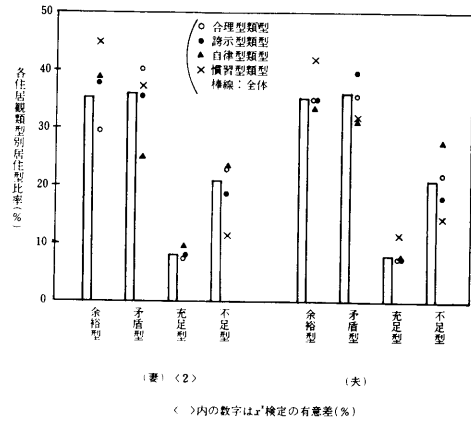


図15 住居観類型と居住型の関連

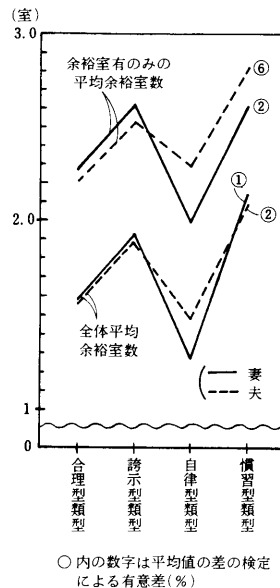


図16 住居観類型と余裕室数の関連

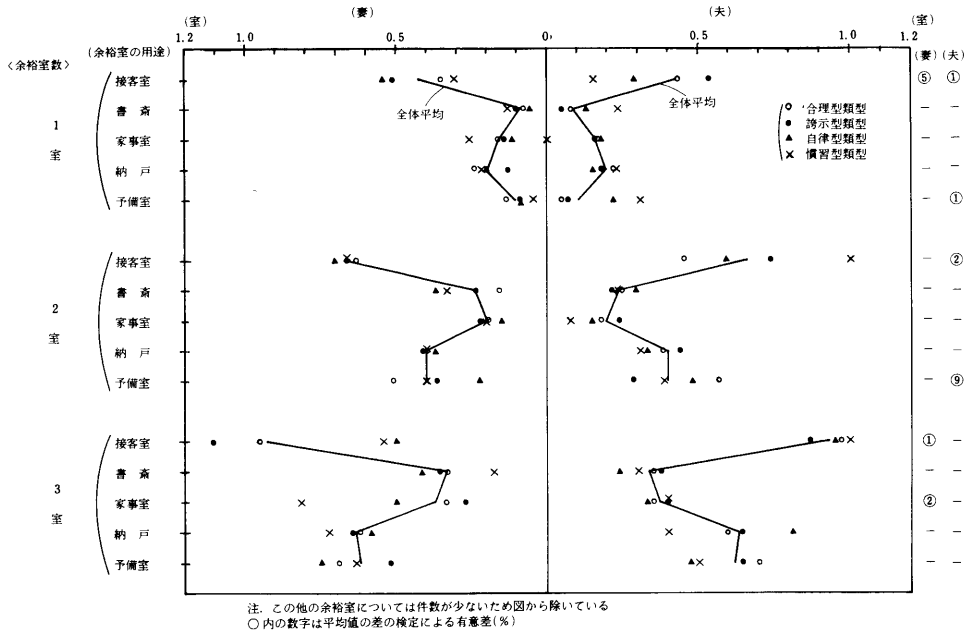


図17 住居観類型と余裕室数別各余裕室の平均所有室数の関連

習型類型」では多い傾向がみられる。このように、住居観パターンによって、余裕室数に開きがあるため、各余裕室数別に、余裕室の用途を検討する。余裕室数別の各余裕室の平均室数を図17に示す。

夫の「慣習型類型」では余裕室数1室、2室を通じて家事室の割合が少なく、2室、3室を通じて納戸の割合も少ないが、接客室の割合は多い。妻の「慣習型類型」では、余裕室数1室、3室で家事室の割合が多く、接客室の割合が少なくなっている。すなわち、この型では夫と妻で反対の志向を示しているといえる。次に、「合理型類型」では、余裕室数2室、3室を通じて予備室が多く、この型に矛盾のある住み方が多かったことを重ね合わせると、住空間は有効利用されていない傾向が強いといえる。「誇示型類型」では、夫の余裕室数1室、2室、妻の1室、3室で接客室の割合が多く、接客室重複志向がとらえられる。「自律型類型」では、夫は余裕室数1室、2室、妻は2室、3室で書斎の割合が多く、前節の住意識の余裕室希望の項でとらえた傾向と一致している。

4. 結 論

本報では、都市地域および農村地域に居住する小・中学生をもつ夫と妻各956件を対象にして、住居観

パターンを統計的に抽出し、住居観パターンと平面構成志向の関連について検討した結果、次の諸点が明らかになった。

- 1) 夫と妻別に住意見の平均点を比較し、さらに因子分析を行なった結果を比較して、夫では「社会性重視」志向や「自律」志向が強く、妻では「しきたり」「ねぐら」「マイホーム主義」「合理」志向が強い傾向をとらえた。また、妻では「みせびらかし」意識と「しきたり」意識との関連が強いが夫ではその傾向がみられないことをとらえた。さらに、夫では地域環境問題と公的機関による住宅供給問題の両「社会性重視」意識の関連が弱い、妻では両者に関連が強いことなどが明らかになった。
- 2) 夫・妻全体(1912件)の住意見をQモード因子分析を行なうことによってグルーピングした結果、「合理型類型」「誇示型類型」「自律型類型」「慣習型類型」の4住居観パターンを抽出した。その結果、妻では「合理型類型」の割合が多く、夫では「誇示型類型」と「自律型類型」の割合が多い傾向がとらえられた。
- 3) 住居観パターンと住意見、住理想の側面からとらえた平面構成志向との関連を検討した結果、まず「自律型類型」では夫・妻ともに書斎を余裕室

として希望しており個性重視の傾向があることがあきらかになった。住宅の希望型では、妻は食事・団らんを重視する「LD+K」型希望が多く、空間の分離志向からは、夫・妻ともに接客室分離よりも公私室分離や就寝分離を優先する家族室および個室優先志向と子供室よりも夫婦室を優先する志向がみられた。重視空間の傾向でも接客室よりも家族室重視傾向があり、妻ではさらに子供部屋よりも夫婦室優先志向がとらえられた。プライバシーに対する意識においても、妻では台所・食事室を客からかくす志向は弱い。モノ所有に対しては、夫・妻ともにモノ多所有否定志向は強い。このように、この型では個性重視、接客室よりも居間、個室などの家族用室重視、子供室よりも夫婦室重視の志向で一貫しており、この傾向は妻の方により顕著に表われている。

次に、「合理型類型」では、住宅の希望型において夫に無関心傾向が強く、夫・妻ともに個室の独立性よりも開放的使用を志向している。全体的に、この型では平面構成志向において独自の志向をもたない傾向が強い。

「誇示型類型」では、空間分離志向において、夫は接客室優先志向をもち、重視空間の志向では、妻で接客室重視志向がみられた。起居様式については、夫・妻ともに食事室、居間、子供部屋に対するイス座志向が強い。このように、この型では夫・妻ともに接客室重視志向とイス座化志向が明瞭である。

「慣習型類型」では、住宅の希望型に対して夫では個室よりも家族共用室重視傾向、妻では無関心傾向がみられ、台所の希望型については、夫に独立キッチン志向がみられた。また、空間分離志向では、妻で接客室優先志向、重視空間の傾向では夫で接客室重視志向がみられた。モノ所有に対しては、夫でモノ多所有志向がある。

- 4) 住居観パターンと住生活実態との関連からその平面構成志向を分析した結果、「自律型類型」では、夫・妻ともにモノ所有の実態において、個性を示す生活用品の所有が多く、スペースを必要とするその他の生活用品の所有は少ない傾向がみられた。接客空間の実態においては、居間で接客を行なう傾向が強い。居住型では「矛盾型」の割合が少なく、余裕室の用途では書斎の占める割合が多い。このように、住生活の実態においても個性重視、接客室よりも家族室優先志向が現われており、住意見、住理想でとらえた傾向を裏付けている。

「合理型類型」では、生活用品の所有実態については、夫・妻ともに所有数は少なく、就寝の実態は妻で就寝室の重複、夫で公私室の重複が多くみられ、居住型においても妻では「矛盾型」の割合が多い。このように、住み方に一定の志向がみられず、空間使用の矛盾が多い中で、予備室を多く取るなど、一貫して住生活、住空間に対する無関心さが現われており、住意見、住理想でとらえた傾向を裏付けている。

「誇示型類型」では、生活用品の所有実態については夫・妻ともにモノ多所有の傾向があり、起居様式では、食事のイス座化率が高く、台所の実態では、夫に独立キッチン志向がみられる。接客空間の実態では専用接客室を有することが多く、余裕室の実態においても同傾向が現われている。イス座志向や接客室重視傾向などに住意見・住理想でとらえた傾向が裏付けられている。

「慣習型類型」では、生活用品の所有実態において、夫・妻ともにモノ多所有の傾向をもち、台所の実態については夫に独立キッチン志向がある。居住型では、「余裕型」が多く「不足型」が少なくなっており、この型では現住宅の所有部屋数が多い。余裕室の用途では、夫に接客室が多く、妻では家事室が多くなっており、夫と妻で「しきたり」志向の現われ方が夫では外向きに、妻では内向きにという差異が現われている。モノ多所有や独立キッチン志向、接客室重視志向など夫の方により明瞭にその志向が現われており、住意見・住理想でとらえた傾向が裏付けられている。

- 5) 以上、各住居観パターンとともに、住意見・住理想の側面からとらえた平面構成志向と、住生活実態からとらえた平面構成志向とは関連をもっており、両側面から各住居観パターンがもつ平面構成志向の特徴がとらえられた。このことから、住居観が住宅設計計画解析上の有効な指標となることが、一般居住者の夫・妻においても実証されたと考える。

(注)

- 1) 中島喜代子：「住居観に関する研究——その1、住意識の構造分析」、三重大学教育学部研究紀要第34巻、1983。
- 2) 中島喜代子：「住居観に関する研究——その2、住居観と住要求・住評価の関連」、三重大学教育学部研究紀要第35巻、1984。
- 3) 中島喜代子、上林博雄：「一団地居住者の住居観と住宅志向——平面構成志向と外観デザイン志向——」、大阪市立大学生活科学部紀要第31巻、1983。

- 4) 中島喜代子、上林博雄：「住居観に関する実証的研究（その1）住居観と外観デザイン志向」、「同（その2）住居観と平面構成志向」、日本建築学会近畿支部研究報告集、1982年6月。
- 5) 因子分析の因子抽出法は、共通性の反復推定主因子解を用い、因子数は1.0以上の固有値をもつ因子とし、共通性推定値間の差が0.001以下になるまで計算を繰り返すこととした。因子の回転は、バリマックス回転を用いた。
- 6) Rモード因子分析は、変数間の関連性の要約を目的とするのに対し、Qモード因子分析は、ケース間の関連性を要約するものである。
- 7) この4クラスターは、前報その1、その2で扱った高蔵寺ニュータウンと同類型のクラスターとなっている。